

明へ遠13
品年
1907
34

いろは文庫十二編叙

而謂四十士士も案大是成もあひて
かの奇圖小くもすゞい花石と寛をて讐と
較もくらのこころばしに甲乙あくづ被る
生の英秀もれどもそぞ才よ章を寧ゆく
詮事及體俗の語彙も著く義名と知る
まつりあり又おもむ事の徳をさる

爲水春水紀

名とぞよしむれ。かくぬり行ひ。む名利成
食らんと。あまきは。うすゆ。れど。折ほ
志を成め。あらう。むやく。美名。り。埋
きんゆ。迷憶。う経。ま。まのれ。一。個。み。り
傳成考。猶。の妻子。一族。等。う。生
活。ま。じ。續。く。ん。か。思。す。老。は。ん。も。う。
經。ま。才。に。長。勤。能。治。以。自。ら。編。歎。の。

守も。が。り。我。ま。何。せん。と。之
今更。止。む。聲。き。あ。く。経。モ。と。も。又
第十二編。乃。傳成考。と。

去。捨。の。雪。解。事。
南。庭。の。梅。ち。づ。め。て。寒。く。日。

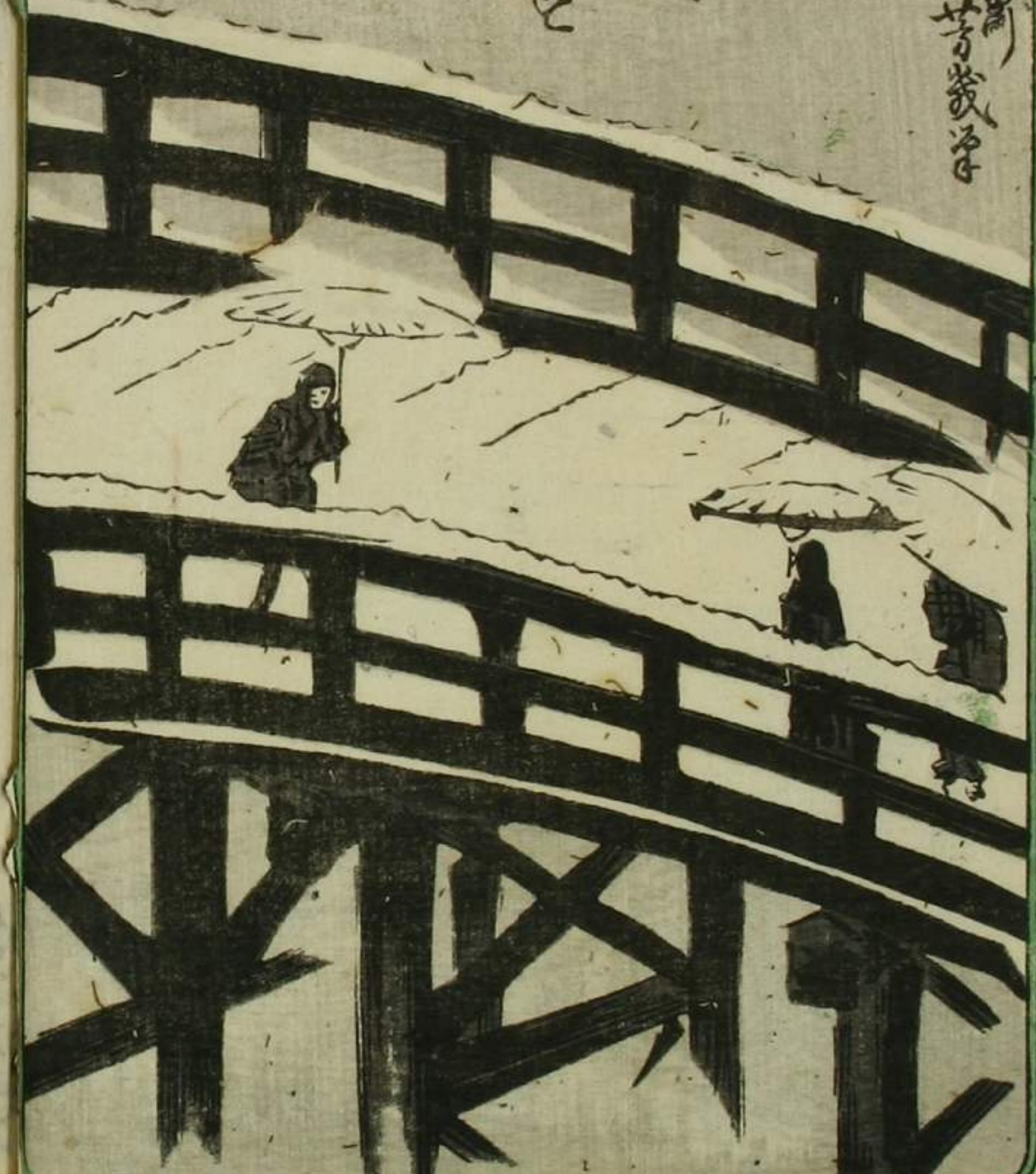






一葉齋
芳叢屋

人足の
夜
かと
深雪



正史
実傳いろは文庫卷之三十四

第六十七回

江戸

爲永春水著

ハ
一ノイク婆アどんが冬を大そううあきまして居る
きうきどう記メモてきうシテアマヤさんふエビ寝る
着でもアズテ居るのソウコレサカ冬ヤ何をそんアホ
アキミるのヨ目をそんて森通りをああ大さ狗
年でも家せて居るのよアあのコレサクトゆく記され

あめい目をうてむすり「ラヤヌイやつちう住居で
ひきあまき子ヤア、怖うつて浦島をホット吐くアレサ
キニキヌのうちの否あ豆をえん癡ざり行ぞ怖い着でも
ヌムシイ、イ寛小否アあ豆を刃のでござるはずが子
きくも差で宣うござカチ、う美也実ふああ
支うあらあらぬきりうとあくとひまざふ約
トツカリぬまとヨト旭尾のあらを手でおさくあぐう教て
あへぬでひく「ヌムシイ差ういさんあふ差くねすであ

と
豆まがあるのうちてアアえあアをアのアアウア
をアる處アりアせんア子アのアアア五ア血アあア豆ア豆アでア
きアきアきアりアあアきア軍アとアてアのアのアわアまアせんアけアきアと
きアかア豆ア豆アへア大ア常アでアあアきアけアてア往アつアてア切ア合アがアもアきアり
まアとアとア子アのア中アふア肉アのアをア助アがア交アつアてア居アちアてア自アら
かアりアのア處アりアまアきアたアりアでア血アどアろアけア小アあアつアてア居アる
あアくア人ア生ア一ア出アてもアいアてア居アちアをアうアアア、あアくアあア今アふ
數アきアきアくアふアまアきア空アとア後アの方アトアつアてアもア出アあアきアと

契を樹クワやうとあつて申喰カサがへまつておが言ハシへませず
えが揃カタマリてあうせんうち小行キムラ法カツをうあのぶ向カミ
出ハシて来ると左シナ又アシテ切合カツガタをうねるねるでどきどきをう
危ハザううて刃ハサミ居リるをませむぞ寧ニホンのゆふ例ヒトツへ往ハシて
加カサ勢カセをゐやうとひのても體カラダうまくんさなりて勤ハラフく
内ナカニ來カムせんら氣カミを揃カタマリて居リる處カタマリをお母モチさん
小コトづきて済スルく氣カミが付タマて目メうきこのとどきのまきを
一ヒサヤ生アタマさんと義ヨシを刃ハサミりのどノウ丈ヒヂでゆ切カツらよ

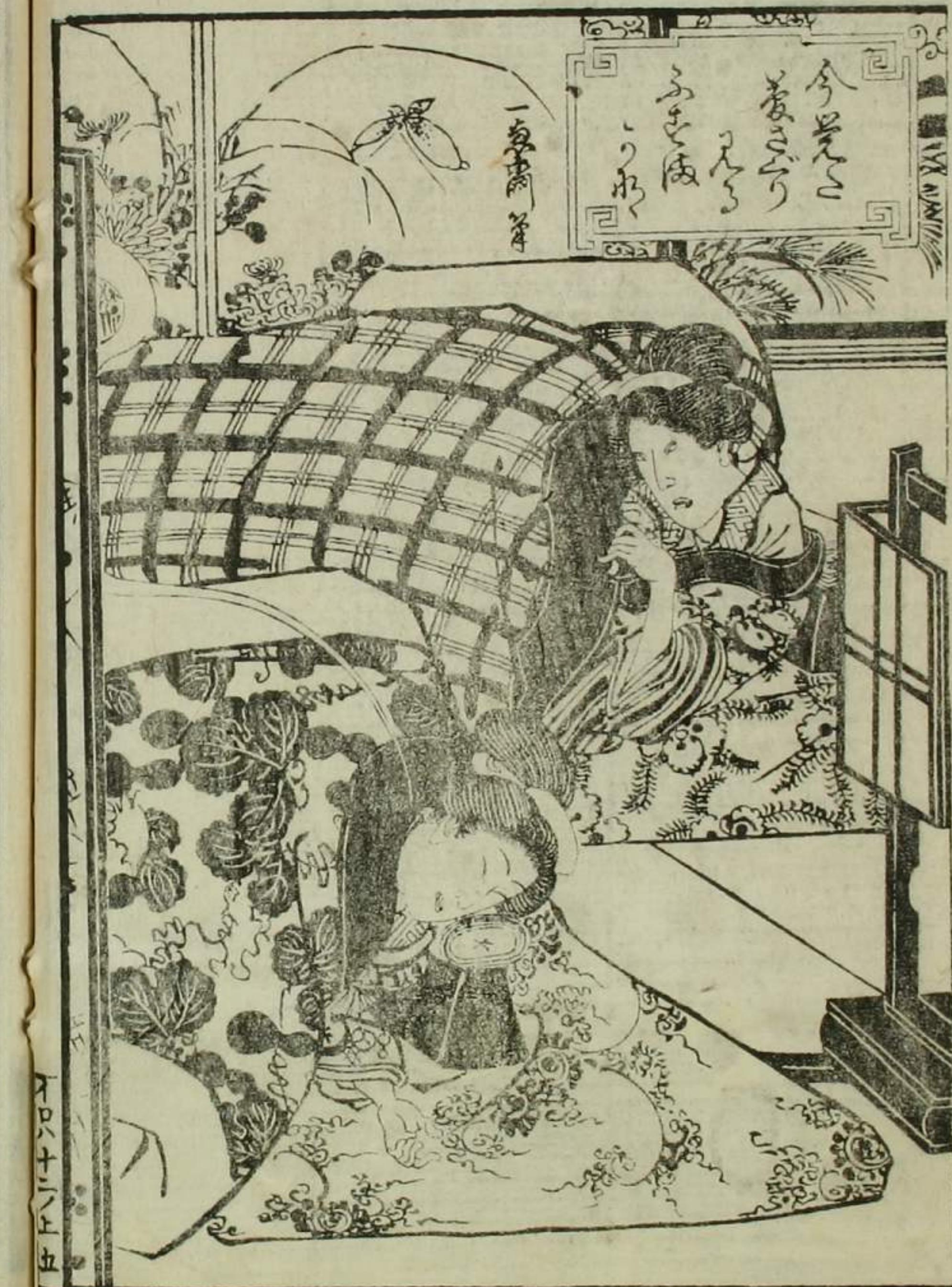
夏カミを刃ハサミと體カラダへ金カネぐもるのどノウ宣アシテ大オホそう宣アシテとひのヨ
彦助カミヂが切カツらきて血カミけふあアシテ廻アシテを刃ハサミこのノ、那人
グ主取シマツタケきシマツタケて毛カミうカミ便アシテくアシテ小コト金カネぐもるといふ和ハシマせ
ざらうカミ宣アシテひアシテあアシテ、然アシテうカミ宣アシテひアシテあアシテ、
けアシテど由アシテ何アシテうカミ小コトかアシテつてあうませんヨトアシテび肉アシテ左アシテ肉アシテ
ハアシテ手アシテ組アシテでつアシテぐと咬アシテて居アシテ一ヒサハアシテナアシテ仰アシテ指アシテわアシテ氣アシテに
あアシテすアシテきアシテ、アシテ考アシテ考アシテ行アシテが氣アシテ小コトあアシテまアシテモエアシテ、然アシテ
ハアシテ此アシテ身アシテ先アシテ刻アシテうカミ言アシテ出アシテそアシテうカミとアシテ、若アシテさアシテけアシテ

どもかわ 達小余本末苦勞をさせりでゆあいと
獨りで狗を痛めて居てが先刻を助ケ歸る時
教を及さうハイ何ぞもグ付さうあんじよ變く事
由田をさるまへ左とあまとえどもども一
望ハ主人不同見をもろと言ふのあらん脚
うきうきて出て往く所どこの小帳をもつて別まる時
ホロリと涙をこぼあざれりであつちを向と教ケ給
招由食忘が往うあいところうそガイヤ／＼是ゆ年暮の

僻聞ひづめとろひ持て生あふ今欣森席へ送へ廻
頃あき小狗しよさきぎまの小窓の内へまく雪まきぐ
かうあぐ耳みみふ隣となりて空とも麻まうさスガい出
あてほゞと多助の招むけを考かつての不^い百
途中で毛けつて時ときより令めい爲まつ事ことて居ゐた老おがんさんや餘
切不世活ふせうて居ゐた老おがると言つて篠しのうに昔日の肉
不主取ふしゆとりが出来て身のまゝままで立候たつトあらよろの
でもあまへが差走經不世活ふせをもる人ひとがありの

あら縫ひもとの病まで経への金を巻ひ累くみてふも
あとあととてことの人の世話で
あらあ菜小菴なづなを賣うあへて日向振ふりきの人の世話で
て自室じしつと舎やの宦い世渡よりハ出来できやうふうのの小
零ちから底そこののきさく立たつ派は小あへへきうむあんまん
遠とおもと處ところ生うあへへつけてお業わざをあへて又また小内
外ほか赤保あかほの誠まことを及およきこ時ときがゆゆに谷浪たにな人ひとが主人
の讐言しめごん討うをまる小遠とおひあへへと言い評ひ判ばんで高たかの座ざ姿すがた
で由ゆひく用もちひ處ところ出だす後ごと後ご二向にむか盤ばん

討うの根ねををあへへ流なが不ふ拿なハ情じょういのう拂ふひひ拂ふ
と腰こし拂ふりと熟じゅくにきりふ素そりああののささを比ひべべアあんん
鳴なききききののささああつて仕つかひひ一ひと舎や那な助すけハ
義ぎの雲くもの雷らいどくどく所ところををせき主人しゆじんの怨おを報むくりりとと
子こ管くびで故むかの根ねををきらきらふああ不ふ零れい房ぼうと舎やふ穿う
をを穿うるる供ともりり供とも付つと見み惜うをを為なくく今いま順じゆ
もも小こああつつののでであるあるままののううああららととあるある紀き根ね篠しの劍けん



まちうさ
事公候を終へと言ひきうる處を下る西番の後候
方とぞうり言ふう史ハ何方と官通をうとぞくうち
多く笑く支那言ひ度々多ひか那男が帰りとゑぐ
のそ望の勝事と時本空てゆ解るとひまつて
シガ西番方と言ひこのハ西方洋大との事うとうあ
と
支まで猶不深んで自己ア音ううまんづともせむに
居こが今ラ又おその爰の脚でもの含せて乃まが今
ト
月ハ毎月十四日月とそかに此不辰の日食日ト
ト

えや
今夜宿の在處へ主人の然とを報ふと討入を為と
のとぞくも多ひは対達の事と案るまへやみれど
而て所のけきどりのうらうへを助の支をばくのるゆ
あ
意をそなめまひある実が自然と至て不知不ふを
爰をそなのであるまへを爰といふねハ皆ふもあ
あひのじけきどり爰の告とり支りあり正義と
り、支り肯ううあるぬとくに考へ見だ考へ
程何招も爲ううあつまひうそらはまうぞうと
ト

言ひまく二個ハ物アセテガ中少ゆおをハ済シキ
父兄さん史ダヌ一実正アラ私火アヘ根跡マサニ
在ヘテナシ志の史ダヌ實正の史アラハ百石に抱ヘられ
テのうち猶ハサ一子ノモトマアんご史をメ作ドヤア
ミミイチゼンウ志実正ヒロ浅トキニモ助ガキ場
セ切穀ミタリツ又教ミキアハ処グソルホ史を務ム
ミク只で歟ゼ史トハジムナシホ精の今ホカ
クラ度グ歟ヒムシキミトミトミトミガスアヤシムヒ生

せん「左^モ右^モ廉^ヒを言^フ一夫^モ衣^ヒ火^モハニ^モ不^モ事^フ」^ア自^モ女^モ
あ史^モ不^モき^モモ^トア^モ女^モホ^モ車^モハ^モね^モど^モ漢^モレ^モ
ツモ居^モシ^モや^モダ^モ那^モ男^モ百^モ石^モ外^モの大^モ石^モ抱^ヘ
ラヨ^モシ^モい^モの^モハ^モ身^モ平^モ至^モア^モ、ア^モハ^モア^モア^モ並^モ
故^モア^モハ^モこ^モを^モ付^モア^モ史^モハ^モ出^モ來^モ史^モハ^モ有^モ
ま^モ然^モう^モと^モ又^モ苦^モ行^モ時^モア^モハ^モ浪^モ人^モア^モ希^モま^モ
ぬ^モア^モあ^モう^モ足^モ苦^モ行^モ形^モを^モ有^モて居^モよ^モ主^モ取^モて而^モ不^モ得^モ在^モ付^モとの^モ活^モ構^モア^モ史^モと^モ歎^モ

セテ居て第一ひきの考へきる故の屋敷へ付入を爲
ので見ろ處で付入を爲すと又へ車籠を運び
で切役を爲すとゆ承世武の禮と言はまつて
ひくの支ハありぬて否あ、二三忘まど居てがお多
お先刻多助が仰どり於けて姓ツコメアあひウソ
きあ振紗包モ「うしひ身ゆ萬ううとものと走を
一寸持つて未と足せまて言ひとてお多ハ身を記し
用箋箋の引出小入てお一一小包を取出す事

タマシタト大もふのうが送入つて居るゝと結へ
紙縁で封ヶ高てござるますモ「下左見せませ」
不取左「あ、程とて金で由送入して居る大も
きの包左「い」
かある。他令大切あやづ送入つて居るふもあら現
在の女房不取けて仍の小封を多く小口及がまへ
封を結んだのふもう小附て多くあひやう不居
のどらう然うとて多くとひうち不り、仔細の

あり更とあらきようち毎のてつまみを詰ふが初見る
ざらうト件の猿珍包を解かねばアレホア考
公候令聲のかどろとえつて村トの為てあらぬと
がくべく裏め熟うである時も、致づて猿珍をゆ
まくも、熟うである時も、致づて猿珍をゆ
の處へ詠きのよやアどきひきせんく左
右遠うそとてあいわせり運入つて詰まつては角が
えす
鬼・助ふ言訣をもつち冬の迷惑不自由の
構ひふゆある支ぐあひひ身不犯せとをくら宮ト

イロハナニ上九

い
言ひ々 封を切つて包 一猿珍を詰まつて
おさく ト リ
バ一封の書状ありとすと書小萩種左内詔(中村
えす
圭助と總めあるトねことと左内をもとめ女房
ゆお冬の儀小おぞらくのこむれをの詰めのわ
ざきとば安きふがあうけを

第六十八回

ま
ラヤ支トア考公の處へ書達とをもと紙で
もとあきようち子エ何から走く禮を文せと下ま

ま おののふはえあざうとらへと窓ふゑが痛
んであすせんくと言あづま燭小灯をとせば左
内ハ良き色の引出 あ 腕鏡をゆてかするも無
づ げ不手紙を書き讀下す文章
一筆ヤヒ残レひあらまご今日御教の砌東山
の秘史うち胸中とゞく假不西の方の法修へ
奉公修のアヒサヤウアリシども実、今既
同盟の老じゆ合せ必死の差情せしむ他

笑をね襟りひとゆ一妻細少ひやとぞりとゆく底
意場に足難事か由下さべキ狹只りと筋不思
議うべ只箋最妙の場所をのこねあせられ
柄多事お懃めまちし得幸て曰比のひ惡情と
申報ドガく今を山名残とちやうひ入金不空
があら毛まぐ用意ふとてお船アキリ(どゆ
事)お此ふとて入用由由度あくつる社者
元治まで冬づ家の左附の助と申立候下さ

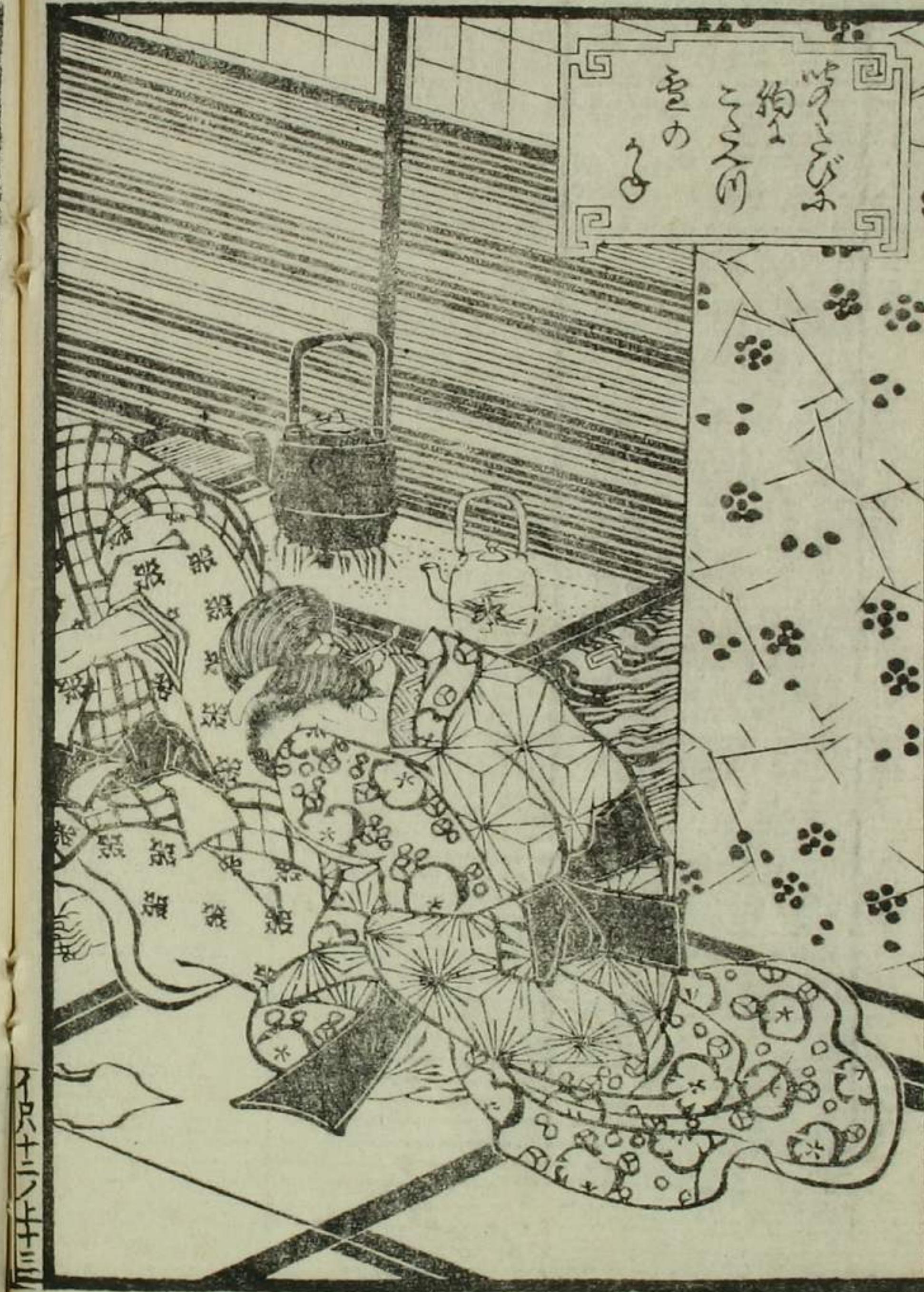
あらあら
あよどり
じゆうく
さま
あらあらと海へひ書状死後不四一院を下り
ひのきう死見とゆる石と下べいひと
ト筆復かゆくとども赤んこに廻不あらはきてのと
あらぬを小吹するふぞお父を「もとよりわ種きくがくへを。
ワット這出せば左内由雄へね老の疾せきあると香
え左
込で「まめろ」と這するあへんお月出たひ東へあい
ぞ「まざつて見づ這あひ居くとせきをめうを助
ハ先怡のうへてゆびさみませうが私しめアお父のふ

わ
根ヶ可憐かであつません只い立派小作けりと由
あら
半と由注てお在あさるトセアジギハません「モる廉ア
宣ひ身のへ病一病がこがまるのとがお父を内注あヨヨおけ
う
半年の程へあひう考ぐておもあくどうつ支を金
だくへどりあひう考ぐておもあくどうつ支を金
主人の款を安穏あへて悉あざう付ゆせまどを淮櫻核
武士と人小波う核をきり生ても寧の命を大ひふ不思
く連満て居るのが官ひう又先刻の言ツとあア
ひ

新しんはあく並なみこのまで寳たからのどとあるのを手て辛から万苦まんご
あて首尾そびよく本業ほんぎょうを遂とげて是これが官くわんひ吏りこそ末代まつだい
英名えいめいを族くぞくも大おほき勢ぜいもあらうの爲ためを良よ吏り小こ枝えだとお逃なまけ
ハム家くわんける家の妻めい方かた小こあいとよく申まことせらの食器しょくき吏りを
揺ゆきんで舞まい小こあいとけ身みもとささまの軍加ぐんかふ叶はごと
りのどどかおおハナのむむ腰拔こしぬきでも支拂さしふふきのを奉まつ
て居ゐるのうよよや良よ吏りを腰拔こしぬきふきのを奉まつ
ト申まことすまの假ま令れい生うあざざへて支拂さしふふきのを奉まつ

小こゆくのままの假ま令れい生うあざざへて支拂さしふふきのを奉まつ

久ひ先さきもくうて三十年さんねんうで十年じゅうねんうづき一いつ度どハ死別しべつ
きをせひばああくね只ただ走はしいときの遠とほひをくうてち遠とほ
別べつああくででああくい更またああく死しと終まつまで名なの族くぞくも
不ふ為めくふののどときのううで死しねをくうう侍し士しの本業ほんぎょう
どとああいは育いくああどども長ながののああく四よ主人しゆじんののちちくくも
今いまでも命まことを捨するすへおの殺ころとゆゆふふへ居ゐききも
助すけすあげあげよよんんざざふふ恥はずてて未み練れんみ後ごををこうこうを
ままモト屢たままきまきる父ちちの辭こと小こハイ候まわくとみみ要いい



か辯有難ひござひまきをすまうく 況ハ歎一ません
そ 無うりと良史の下者あへ候在うち附て一言でゆえ
て嘆せても莫キさんざらう 私のやうな考へざるうそ
お義のとあに死不徳くともうきのをモズム止め歎
ちもも得ふをとぞうづひせあて別の意でモズ
交一もせうりの不登の曉に来るあんぞとモズく 故
事で徳をあがえづ本意をとどきにモズトのひうきて又
休あづゑば ハニサ 史ハ魚痴とつりと見経の一大事と

内を観る史揮のゆで由はぢくとて莫一とあせり が世
先 るへ泄きと大変どくと年を遙るまでに変ては外為
まこと言ふ眼ひを立て萬と更小遠ひがあひ支どりのと
ひ深ふゆさんあをがうをほりせてあるのとまづ一ゆき
ちで人情のあひゆうあとひ書をあおねの所の左附
をゆれて食ちて漏て漏て残とのし余糧為ふらゆ
であらうの小羽屋のとを助の仕方深不甘くあ寄ご
さき まごめを候小ゆ恨みういをぶつぶい漏あのゼト云

あらうに色を見えまへ「今、急角りふうち夜が時
大きな夜のうち市助を遙うであります。延出で
仕事でゆくとひきうどが派石小をとる事由あらざるが
室うどと為すと世局の評判で、も相あがれまど
らうとア竹あろ市助名あべを記して飯で、も林せ
るが官ひつあ「おニ高生と居まつて市助は昨日の夕
方お申度をへたを御の夜のお酒を持とせそ
つとまごが支つかひも、歸りません」おはさかと左を御、左の船
あそびの見あらう中庭

あらう隠居のううつとめでひ夜は左を
泊ひとくと云ふと、一困ひのめど大きき船へでも
送入つて帰る度を高生このじらう那男の外小をと
いあらう酒を呑むと高生のあいのとまく間をかせ
あらうあのト音あらうびのとをドンと叩きあらう「モレ
玄をかぬあまつて下さるまつた後お餘効が出来込
ふと大生あ声みてこめくとお種ハ出とテを貯まつう
「ほくば男ハ作ひのトりんを構ひまつ便肉」
あらう「モレりぬきみありてちやアあらません心を應付

くも左あさひモート服の足を替てりやが「コレサウ
ハシとモ周章の居あいがえめ仕をあひて奉るのぞう
モアモアモアモアモアモアモアモアモアモアモア
次度由流のあひでさうとあるど「ナニ次度ゆみ人を厭で
居らきまきとわのう向へハ根柢の達のち、首をさうと
あえぎ
多人数五六十人をうと半か支くうと内ハしつと
市助左近まつま
市助よおのをうふえくい行のすゞはが解ら
あい行ゆ周をあらわへあひう乳を薦付とこうふとぬて波
せらぐ宣ひトのまほを勧くをあひ「あひ龍船うたうううう
古事記上十六

ヨリ
お辭をもとめのまゝの昨日の夕方未だ物のお典儀を持て
お申在處へ往キテ御殿不居る玉老が雪づ降出でま
のわちかと一至りて候あつと云ひてあひ答付でどうく
を歎(歎)接(接)け辞(辭)禮(禮)とて仕立ましとあひと同(同)意(意)て見
ゆこと承(承)うて居ましとあひましとふであひ
あひと承(承)うて居ましとあひましとふであひ
とと小聲(小聲)きりとまきとまきの歎(歎)接(接)と臣(臣)人のよ
のをまくと隨(隨)意(意)の浪人(浪人)の居處へ討(討)と歎(歎)

と まことに まことに く まことに まことに まことに
を取って今ひき引とげて来るといふ強きもろ能令毛
くあつて巨物ふらうとまでも見をえあひて帰ら毛と
生がちり まうり ま か と ま と ま と ま と
人立の中へ送ひて宿すて居ると頃との度ふ向ひて來は
と子毛うや威勢の度ひ度とひからへ度ふ大敵を肴ふ
うりうり奴が来ると史毛脇毛役列を立て來るのう筋中
色がうけふあつて居るのゆあまび接觸の達をかういど
のゆあみて強勢でとどくとどくとどくとどくと
か 左毛 右毛 左毛 右毛 左毛 右毛 左毛 右毛
て居とく行を譲へほしと かど八百處とア賄日來

不只十三上ナセ

と 大事毛葉のひ羽の度でどどくとどくと
ぐのふくと仲毛小交ツて居とどくと 「エ」 と
まう物うあくとくとくとくとくとくとくとくと
極んでい含ひあくとくとくとくとくとくとくと
りをうち吹くとくとくとくとくとくとくとくと
由あうけ

